

各地で目撃し、遭遇する事件を通して歴史が捉えられていきます。しかも旅芸人一家の父の名前はアガメムノン、母はクリュタイムネストラ、長女はエレクトラというように、古代ギリシアの神話を下敷きにしています。歴史上の事件とギリシア神話を思わせる一家の出来事、そして一座が演じる劇中劇とが、幾重にも重なりあって物語を紡いでいきます。また一座は、旅を繰り返すことによって時間のなかをもさまよいます。この時間と空間をめぐる旅を通して我々は過酷な運命に耐えながら、生きることをあきらめないギリシアの民衆の姿を知ることができます。

演出は全体に抑制的で、例えばカメラを固定して事件を正面から撮ることにより、演劇の舞台を思わせるような演出が多用されています。音楽も控えめで、それだけにいっそう人々の足音や雨音などが印象的に響いてきます。

その他の代表作として『シテール島への船出』(1984年)があげられます。30数年ぶりにかつての内戦の英雄が国外追放から帰ってきます。人々は戸惑いながらも彼を歓迎しますが、そこにある種の居心地の悪さも感じているようです。ある日、村の人たちが土地を売ろうとしているのを彼は知ります。その土地はかつて彼が仲間とともに命をかけて地主たちから勝ち取ったものでした。彼は静かに抗議の姿勢を見せ始めます。豊かになった人々が忘れてしまった大切なものを再度突きつけられて困惑する人々の様子が、やはり静かに淡々と描写されていきます。物語はここでも象徴的に表現され、現実の出来事と主人公の監督が撮影中の映画の場面とが重なりながら、進んでいきます。この作品の背景にも、トロイ戦争の後も長く故郷を留守にして彷徨をつづけたオデュッセウスの帰還と夫を待ち続けた妻ペネロペーの神話が重ねられています。

タイトルの『シテール島への船出』から連想されるワトーの絵画のような美しい画面が印象

に残り、特に最後の「船出」の場面は忘れることのできない場面となるでしょう。彼の居場所は故郷にはもうないのです。救いのない結末のなか、信念を持つ人の美しさと、困難の中で再び見出された夫婦の愛が、夢をかなえる伝説の島「シテール島」への船出を連想させるのでしょうか。

その他にヨーロッパの豊かな国への出稼ぎに頼らざるを得ないギリシアの社会を背景にした『霧の中の風景』(1988年)や移民問題を扱った『こうのとりの、たちずさんで』など、アンゲロプロス監督は数々の難問に、美しい画面で、静かにしかしきっぱりとした抗議の姿勢をもって挑んでいきます。

アンゲロプロス監督の映画を私はきちんと理解できたわけではありません。しかし彼の映画を通してヨーロッパの周辺国であるギリシアが抱える問題に触れ、その苦悩をうかがい知ることができました。ヨーロッパの中に多様性という言葉で簡単に済ませることのできない現実があるのです。

映画そのものの説明はうまくはできませんが、アンゲロプロス監督とその作品の紹介には少しはなったのではないのでしょうか。この名前を覚えておいて、機会があればぜひご覧ください。皆さんのヨーロッパの理解が深まるきっかけになることは保証いたします。

戦車、白鳥の湖を踊る ～ロシア映画『T-34』(2018年)～

経済学部 清水 伸子



1. 戦車は奥が深い

「戦車博物館に行きたいんですね。」

最近5年の間に、この告白を4人の学生から聞いている(実際に行った学生も1人いる)。

面白いことに、この学生たちは、みんながみんな、どこに戦車博物館があるのかを言わずに、いきなり「戦車博物館」で話を始めるという共通点がある。どうやら、「清水なら、戦車博物館」だけで話が通じる」と思っているようで、大変不思議である。

はじめてこの告白を聞いたとき、モスクワの戦勝記念公園の博物館に戦車が1台展示されているのを思い出した。しかし、学生の話によると、モスクワ州クビンカ市の戦車博物館はそんなものではなく、何台もの戦車が展示されているのだそうだ。どこからそんなことを知るのだろうと驚く私を尻目に、学生たちは、この告白に続いて、型式を挙げながら戦車の性能について語り始めたり、独ソ戦における戦車戦について語り始めたりする。「うわー、まったく話についていけない・・・」と思いつつも、彼らの熱い話しぶりに、<きつと戦車って奥が深いのだろう（実際にはよく知らないけど・・・）>と何度思ったことか・・・。

その私が、戦車の奥深さを実感できたのは、『T-34 レジェンド・オブ・ウォー』（2018）というロシア映画のおかげである。この映画は、ロシアで観客動員800万人、興行収益40億のメガヒットとなった映画である。愛大のO先生が、「ロシアも、やっとエンターテインメント性の高い映画が作れるようになった！」との言葉と共に、この映画を見るように勧めてくれなかったら、私は戦車を熱く語るあの学生たちの気持ちを理解できないままであったろう。

この映画を見て、はじめて、戦車は正面を攻撃してもダメで、横っ腹を狙わないと砲弾を貫通させられない（＝敵方戦車をつぶせない）ということを知った。また、敵軍を待ち伏せする場合には、戦車を藁や小屋を使って隠すなど、その場所に合ったカモフラージュの方法を考える必要があり、また、戦場の地形や街の建物の配置から敵の走行ルートを予測し、まるで将棋盤の上に駒を配置するがごとく戦車の布陣を決

める必要があることも知った。その上、接近戦ともなると、戦車自体の性能に左右される走行速度、砲身の方向を変える時間、砲弾を発射してから次の砲弾を発射するまでの間隔、そしてあの巨体を素早く方向転換させられる戦車運転者の操作技術など、様々なことを戦車戦指揮官は考えながら判断を下していかなければならない。戦車戦は高度な頭脳戦でもあるのだ。

2. 二つの映画『T-34』

実は、『T-34』という映画は二つある。アレクセイ・シドロフ脚本・監督の2018年のロシア作品と、ソビエト連邦時代の1965年に撮影された原題《Жаворонок: ひばり（邦題『鬼戦車 T-34』）》である。

両映画とも、大祖国戦争（日本では第2次世界大戦と呼ぶ）中に、ドイツ軍捕虜収容所からロシア製戦車 T-34 に乗った4人が脱走するという話である。しかし、この両者はストーリーも結末も違う。

ロシア映画『T-34』（2018）の監督兼脚本家のアレクセイ・シドロフは、「ソ連時代の映画『T-34』（1965）から影響を受けた作品ではなく、両者は全く別の作品であり、フィクションである」と述べている。実際、戦争中に、ドイツ軍は、自軍の軍事演習のためにロシア人捕虜に戦車を操縦させた事実はあったようだが、脱走に成功した者はいなかったようだ。

また、シドロフは、「大祖国戦争を記憶に残している人々の間で矛盾を引き起こさず、若者を魅了するような方法で戦争の歴史を伝えるという設定にした」とも述べている。エンドロールで「大祖国戦争で戦った英雄、負傷兵、戦没者、帰還兵、独ソ戦を戦った全ての戦車兵に捧げる」との言葉が映し出されるので、完全なるエンターテインメント作品として作られたわけではないようだが、この「若者を魅了する」という方針が、二つの映画を全く別の映画にしたとってよいだろう。

3. 牧歌的な戦争映画『T-34』（1965年）

ソ連映画『T-34』（1965年）は、戦争映画らしく、ソビエト軍の誇りであったT-34の力強い姿を描き出している。しかし、その一方で、戦争映画でありながら、人が死ぬ場面は直接描写されない。戦車が走行するシーンでは牧歌的な音楽が流れたりして、戦争映画でありながら、むしろユーモラスにも感じられる。

1965年と言えば、まだ大祖国戦争が終わって20年ほどである。ロシア人は、ロシアの地が戦場となった二つの戦争、ナポレオン戦争と第2次世界大戦を大祖国戦争と呼ぶ。その2度目の大祖国戦争の独ソ戦で、ソ連軍は、戦車9,200両、迫撃砲4万7,000門を投入しており、当時の観客にとっては、家族や友人がこの戦争で帰らぬ人となった記憶が未だ生々しかった時代だったはずである。この『T-34』（1965年）の牧歌的な雰囲気は、陰惨な戦争映画としないための演出の結果なのではないかと思う。

4. 斬新なシドロフの『T-34』（2018年）

これに対して、シドロフの戦車T-34の描写は全く違う。シドロフは、映画の中で、あの巨大な戦車を、チャイコフスキーの「白鳥の湖」の音楽をバックに、踊るように動き回らせている。車列脇すれすれを走行したり、くると軽やかにターンしたりするその姿は、まさに繊細で可憐なバレリーナのようなようである。

また、この映画は、映画『マトリックス』ばりにパソコン処理をした映像と、音楽を効果的に使った演出を駆使し、手に汗握る作品に仕上げられている。最後の一騎打ちのシーンへの場面転換は、ちょっとご都合主義的のようにも思えるが、しかし、この映画をエンターテインメント系軍事アクション映画として成功に導いた最大の要因は、映画の主題を国家間の対立とせず、むしろ戦車戦指揮官同士であるロシア人将校とドイツ人将校の個人対決に焦点を絞った点にあると考える。これらの特徴が、今までのソ

ビエト・ロシア映画にない斬新さを感じさせるのだ。

5. しのぶれど、色に出にけり

それでもやはり、『T-34』（2018年）を見た私の第一印象は、<やはりこの映画はロシア的だ>ということである。

その理由はいくつかあるが、その一つが、この映画にユロージヴィ（ロシア語では《юродивый：瘋癲行者》）の人物を登場させていることである。逃走する4人の戦車乗組員の1人である彼は、途中、街で食べ物を奪おうと提案した仲間に、「奪うのはダメだよ。お願いしなきゃ」と言っている。彼は、シリアスなストーリーの中で笑いを添えるために配置された脱力系キャラではない。ロシアでは、瘋癲行者は、キリストの受難を自発的に追体験するために患者を装う聖患者として愛されており、ドストエフスキーの『白痴』の主人公であるマイシュキン侯爵や、絵画「モロゾワ夫人」（スーリコフ画1884 - 87）の右端で雪の上で座り込む男など、ロシア人にとって非常に馴染みのある存在なのである。

そして、私が一番ロシア的だと思うのは、この映画が、正義が勝ち悪が敗れるという単純なスーパーマン的ストーリーにはなっていないという点にある。

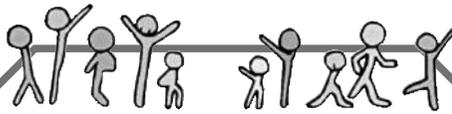
ロシア映画では、アメリカのエンターテインメ



T-34

出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Zagan_czolg_T34_85.jpg

ント系アクション映画でよくみられるように、敵を倒した主人公が最後に晴れ晴れとした表情を見せることはない。そして、これと同時に、敵役登場人物も憎い敵役のまま終わるのではなく、主人公と敵の心が通じ合ったと感じさせるシーンが映画に挿入されるように思う。例えば、映画『コーカサスの虜』（セルゲイ・ボドロフ監督 1997年）は、自分を軟禁していたチェチェン人の村を爆撃するために飛んでいく戦闘機に向かって主人公が「ダメだ。やめてくれ。戻れ！」と叫びながら走り出すシーンで終わる。そして、この『T-34』（2018年）でも、映画最後で、あえて主人公を道連れにすることを選ばなかった敵将校の姿が描かれていると私は思う。不覚にも、このシーンにぐっと来てしまった。やっぱり、ロシア映画は一味違う。ぜひ映画を見て欲しい。（完）



韓国セミナーで見た 『ジャンヌダルク』

現代中国学部 藤森 猛

韓国セミナー

今から21年前の2000年1月～2月にかけて、愛知大学の韓国短期セミナーが提携大学の中央大学で実施され（第3回）、私は引率として参加しました。記録を見ると学生さんたちは1月31日から2月18日までソウルの中央大学で語学研修を受け、語学研修の最終日は、中央大学の修了式や女子寮や下宿へのあいさつ、荷物整理などがあり、1日の休養をはさんで、釜山・慶州への研修旅行に向かいました。修了式の当日、私は学生さんたちと語学研修の9階教室までゼーゼー言いながら階段を上りましたが、学生さんたちが9階までノンストップで駆け上がる姿を見て、愛大の学生さんたちが真冬のソウ



中央大学のキャンパスで（修了式の後）

ルで健康でいられた秘訣はこれだと確信しました。当時の中央大学などの韓国の大学では学生さんの教室のある建物にはエレベーターがついてないことが多く、愛大生は、朝晩・お昼・休憩の時間ごとに1階から9階をダッシュで駆け上がっていたのです。修了式の後には、学生さんたちは、下宿の管理人の方へあいさつをしました。韓国では今でも賄い付きの下宿に住んで通学する大学生が多いのですが、愛大の男子学生14名も下宿生活にすっかり慣れ、下宿のおばさん「아주머니」（アジュモニ、アジュマ）の朝晩の手料理がおいしかったと言っていたことを覚えています。

ソウルの映画館

韓国の中央大学は中心街の江南（カンナム）や明洞（ミョンドン）にわりと近く、学生さんたちは数人でタクシーや地下鉄を使って、買い物などをしていました。私は修了式のあとの休養日に学生さんたちと繁華街に行き、映画を見ました。映画館ではチケットを買う人の列がすごかったのですが、なんとか当日券を買い求め映画館に入りました。私は韓国映画の上映だと思ってチケットを購入したのですが、映画が開始されると、なんとリュックベンソン監督のアメリカ映画『ジャンヌダルク』でした。わたしはチケット売り場に書いてあった「잔다르크」（ジャンヌダルク）というハンゲルが理解できないままチケットを買ってしまったのです。このことで引率の私は中国語の教員で、韓国語は全く当てにならないという噂が学生さんたちの